

IV 果樹

実況

1 ウメ

(1) 生育状況 (園芸研究センター)

11月上旬から本格的に落葉が始まり、11月20日現在、「紅サシ」で30%程度落葉している。無防除園では落葉が終わっている樹もある。

11月20日時点で、「紅サシ」の短果枝花芽密度は1.92個/cm(平年1.67個/cm)であり、平年より高い。

(2) 地域状況

11月末現在、各地でせん定作業が進められている。

ウメ花枝は12月3日から集荷が始まり、計6回の集荷で120万本の出荷が計画されている。

2 ナシ

(1) 生育状況 (農業試験場)

11月19日現在、「幸水」・「豊水」ともにほぼ落葉した。

(2) 地域状況

落葉は、平年並みに進んでいる。「幸水」などのえき花芽の着生は園により差はあるが、おおむね良好である。

粗せん定が終了し、本せん定が始まっている。

3 カキ

(1) 生育状況 (農業試験場)

「刀根早生」は10月1日から収穫を始め、前年より8日早い10月17日に終了した。平年に比べ大玉で、糖度は平年並みであった。

「平核無」は10月22日から収穫を始め、前年より3日早い11月12日に終了した。平年に比べ大玉で糖度が高かった(表1)。

表1 カキの生育と果実品質

品種	年次	発芽期	開花期(月/日)			収穫期		平均果重(g)	糖度(%)
			始期	盛期	終期	始期	終期		
刀根早生	2018	3/26	5/16	5/18	5/21	10/1	10/17	282	15.0
	2017	4/3	5/21	5/22	5/24	10/4	10/25	256	15.8
	2016	3/21	5/15	5/16	5/18	10/7	10/21	273	17.0
	2015	3/26	5/15	5/17	5/19	10/2	10/19	287	15.9
	2014	3/28	5/22	5/24	5/26	10/8	10/28	266	18.0
	平年	3/29	5/21	5/23	5/25	10/5	10/21	243	15.2
平核無	2018	3/27	5/16	5/18	5/21	10/22	11/12	295	17.4
	2017	4/4	5/21	5/22	5/24	10/29	11/15	282	15.6
	2016	3/21	5/15	5/16	5/18	10/24	11/7	279	16.2
	2015	3/26	5/15	5/17	5/19	10/23	11/5	293	16.5
	2014	3/28	5/22	5/24	5/26	11/4	11/12	268	16.3
	平年	3/30	5/21	5/24	5/26	10/25	11/10	276	16.1

(2) 地域状況

あわら市の「平核無」は11月7日に収穫が終了した。台風の影響で落果や傷果が増加したが、着果数が多かったため、収穫量は平年より多くなった。あんぽ柿、干し柿の生産が本格的に行われている。落葉は、平年並みに進んでいる。

4 イチジク

(1) 地域状況

若狭管内の出荷は、11月下旬～12月上旬まで継続する予定である。

対 策

各樹種共通

1 苗木の植付け

樹種によって苗木の植付け適期は異なる。

多くの落葉果樹では、雪解け後になると根の伸長が始まり、活着不良により枯死することもあるので、できるだけ休眠の深い年内に植付けを完了する。

植付けは、晴天が続いた後で、土壤水分が少ない状態で作業を行う。前月の情報に従って植え穴を準備し、根が露出しないよう5cm程度の覆土を行うが、接ぎ木部が土の中にかくれてしまわないように注意する。植付け後は、凍害や野ウサギの害を防ぐために、稲わらなどで苗木を覆う。

年内に植え付けできなかった落葉果樹、またはミカン等の常緑果樹で年内に苗木を入手した場合は、数本ずつまとめて排水良好な場所に仮植えし、覆土後に十分量のかん水を行った上で、地上部全体にワラや寒冷紗などを巻き付け、寒風による落葉を防ぎながら越冬させる。融雪後の3月末までに遅れることなく植付けを行う。

2 基肥の施用

11月下旬から基肥の施用時期に入っている。まだ施用していない園地では12月上旬までに施す。地域、樹種ごとの施肥指針に基づき施用する。

3 整枝せん定

落葉果樹でせん定せずに降雪期を迎えると、積雪や着雪によって枝折れが発生しやすくなるので、本格的な降雪シーズン前にせん定作業を進める。特に、ナシ・ブドウ・キウイフルーツなどの棚栽培果樹では、着雪による棚の倒壊を防ぐため、年内に粗せん定を済ませる。

ミカン等の常緑果樹では、冬期間の落葉を防ぐため、ムシロや寒冷紗等で樹冠全体に防寒被覆を行い、融雪後(3月頃)の温暖な日にせん定を行う。

樹種別に特に注意すべき事項は以下のとおりである。

(1) ウメ

地域・園・樹や栽培管理によって花芽のつき具合や結果枝数は異なるので、せん定前に花芽のつき具合や樹勢(新梢の伸び・太さ・数など)をよく観察する。

「紅サシ」では、直射日光が当たるような結果枝では樹脂障害果の発生が多いので、立ち枝側枝よりも骨格枝などから発生した緑枝を残すようにする。

「新平太夫」や「福太夫」は樹勢が強いため、新梢伸長が旺盛で、幼木期～若木期の主枝・亜主枝の先端部からは強勢な新梢が多数発生する。主枝や亜主枝の先端部では、先端から2～3番目に発生した横向きからやや下向きの新梢を1本選び、その新梢長の半分程度に切り返して骨格枝の延長をはかる。骨格枝延長以外の骨格枝先端部の新梢はすべて切除する。2年枝には結果枝が多く着生するため、20cm程度の間隔になるよう間引きせん定を行う。

(2) ナシ

樹冠の拡大に伴い、密植状態になっている園では縮・間伐を計画的に行う。

成木のせん定は、100～150cm前後の長さの側枝を40cm間隔でまんべんなく配置できるように、主枝および垂主枝（1主枝当たり2～3本）を配置する。主枝、垂主枝は真っ直ぐ養成し、先端部は他の部位よりも30～40cm程度高くなるように立ち上がり部を設ける。3～4年以上経過して、花芽が少なくなった古い側枝は更新して若返りを図る。

(3) カキ

樹齢が10年を超えた頃から隣接樹と枝が交差して過密状態になってくるので、縮・間伐を実施する。

永久樹については作業しやすい樹形にするため、主枝先端部は立ててやや強めに切り返す。垂主枝は1主枝当たり2本程度にする。長大化した側枝は整理し、新梢の発生を促して、側枝をまんべんなく配置する。

4 雪害防止対策

(1) 降雪前

各樹種とも粗せん定を急ぐ。

混みあっている部分は、着雪を少なくするため、不要な枝や徒長枝の間引きせん定を実施する。

ナシなどの棚栽培では中支柱を入れるなど棚の補強対策を行う。支線がゆるんで棚が低くなっている場合は、棚締めを行う。吊棚は、積雪による加重が棚に均等にかからない場合があり、少ない雪でもバランスを崩して倒壊する危険性があり注意する。

幼木は結束して樹冠を縮めるか、幹に添わせて支柱を立て、支柱の先端から枝を吊り上げる(図1)。成木では、

主枝等の主要な枝に下からタル木などの支えをあてがい、骨格枝の折損を防止する。

(2) 降雪中・降雪直後

降雪中や降雪後は園内を見回り、枝に付着した雪を払い落とし踏圧する。

雪に埋まった樹や枝は放っておくと雪の沈降で裂開する。多量の降雪があったら、融雪が進まないうちにすみやかに雪中から枝を掘り出し、タル木などのつかい棒をあてがい、枝を持ち上げる。

幼木が積雪によって傾いた場合は、早急に引き起こし、支柱を添えて固定する。

枝折れや枝裂けした場合は、被害が軽い時はヒモや縄等で緊縛して枝の接合をはかる。大きく裂開して枝の接合が困難な場合は切り戻しを行い、ゆ合剤を塗布する。

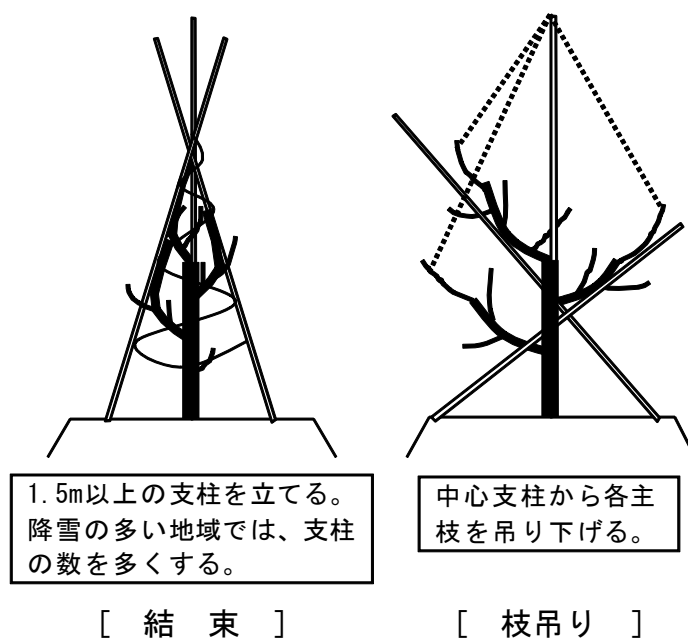


図1 幼木の積雪対策